

韓国人大学生の対日観と学習動機の変化

奥山 洋子

1. 研究報告

レジュメにあるように、前半は学習動機の研究について報告し、私が考える日本語教育についてお話しします。後半は私とナナムの家との接点について、そして現在のナナムの家についてお話しします。

まず、私と纓坂先生が行なっている韓国人学習者の学習動機と対日観の研究について報告します。先行研究、金・呉(1982)では若年層、高学歴、都市部の否定的な対日観報告されていました。ところが、纓坂・奥山(2001)の調査では、先行研究と同様に、日本(人)に対する信頼性や親和性は低かったものの、対日観は肯定的に変化していました。20年という間に当時の若年層が成人層になっているわけですから、母集団が同じで比較ができると考えれば、20年の間に意識が変わったと考えられます。また、纓坂・奥山(2001)の調査では、成人層(両親)と大学生群との間に明らかな差異が認められました。まず、大学生群においては、両国間の差異の認知が日本に対する親和性の形成と関係があることが分かりました。また、成人層は、子女に対する日本語教育に関して、知識として吸収することを期待しており、異文化交流のような行動レベルを求めているわけではないのに対し、大学生群は、知識の獲得よりは日本人との接触、日本文化の理解を求めていることが分かりました。

一方、纓坂・奥山(2003)の調査では、2001年の調査と同じく、日本(人)について親和性よりは先進性を強く意識していることが確認されました。そして、今度は男女による違いが明らかになりました。まず、女子よりも男子の方が、肯定的な認知を行い、韓日間の差異を低く認知していることが分かりました。また、大学生全体の学習動機としては、2001年の調査と同様に、「融合」動機が最も高かったのですが、男子は対人関係のあり方に共通点を見出すことで、日本に対する信頼性と親和性を形成させることが分かりました。そして、信頼性が日本人との交流を志向させていました。これに対して女子の方は、日本人との異質性を認識することが信頼性と親

和性に結びつくことが明らかになりました。また、親和性や信頼性は学習動機形成には関連がなく、日本の先進性に対する評価が日本語知識の習得(「教養」動機)に結びつくことが分かりました。私たちの発見で一番大きかったのは、韓国人の大学生の動機として実用動機が一番大きいのではないかと予想していましたが、それに反して日本人との交流が一番大きかったということです。

2. 調査の際の留意点

私がこの研究をするときに気をつけている観点として1つ目は、短期的変化と長期的変化ということがあります。つまり、メディアなどから入ってくる情報に振り回されてはいけないのと同時に、国民性は簡単に変わらないから学習動機も変わらないというふうに、変化に鈍感になってはならないということです。2つ目は、目に見える変化と目に見えにくい変化ということです。私たちはどうしても目に見える変化に惑わされてしまいがちですが、それだけではなく、目に見えない変化を認知・感情・行動のすべてから察知する能力を自己開発することが重要だと思います。3番目は、韓国人の対日観ばかりが今まで目についたかと思いますが、日本人の対日観についてはあまり関心を払ってこなかったのではないかと思います。これからは双方向から調査し、学習動機の変化を予測する努力も必要だと考えています。このような観点を常に確認しながら調査を行っています。

3. 日本語教育及び外国語教育と、それらに近接する研究分野の研究者との連携は必要か

まず、社会的弱者に対する外国語教育は現在でも存在するかということです。例として戦後の沖縄における国語教育があげられます。これはかなり強制的なもので、教室でうっかり沖縄のことばを使うと方言札を持たされて廊下に立たされるということがありました。また、これは私の意見ですが、韓国の英語教育も親が社会的弱者である子どもに強

制している側面があると思われます。

2 つ目は、教育する側の傲慢な態度の存在は自覚されているかということのを常に考えるわけです。自分が傲慢な教師だと思っている人は一人もいないと思いますが、知らず知らずのうちに自分の教育観を押し付けている可能性があるということを常に自覚する必要があると思います。

3 つ目は、学習者も学習動機を常に意識している必要があるということです。

4 番目は、他の外国語教育との関連性です。私は外国語大学の出身なのですが、外大ほど外交問題などの影響を受けやすく、それは受験者数に顕著に現れます。それだけ外国語教育は基盤が脆弱だということです。でもだからといって外国語教育が社会からなくなることはないと思います。現在韓国では、中国語教育に押されて日本語の学習者が減りつつあるということがあります。これは短期的な現象かもしれないし長期的な現象かもしれませんが、それに惑わされず、自分と日本語教育との関わり、自分と外国語教育との関わりを常に意識化している必要があります。そうすれば、いろいろな問題に対処していくことができると思います。

5 番目は、日本語教育に従事するものにとって社会学的視点は必要かということです。もちろん答えはイエスです。

最後にもう一つ付け加えたいのですが、学習者には教師の思想や人間性はすぐ伝わってしまいます。外国語教育に携わる者はあらゆるものを学習者によって試され、観察されていることを意識してほしいと思います。逆に何も伝わってこない教師というのは何か足りないのではないのでしょうか。

4. ナヌムの家との接点

私は大学卒業後、延世大学の国際学大学院東アジア学科に進み、修士論文で金活蘭の研究を行いました。金活蘭は梨花女子大学の韓国人として初めての校長だった人です。金活蘭は 1899 年にインチョンで生まれ、小さいときからとても優秀だったそうです。家庭は貧しかったのですが、母親が教育熱心で、何とか優秀な娘を勉強させたいと思い、相談したところ、梨花女子大学の寄宿舎に入れて勉強ができるということで、入ったそうです。彼女は非常に優秀で宣教師たちの期待を一身に受けて勉強し、アメリカのコロンビア大学に留学し、1928 年、教育学の

博士号を取得しました。この方はすばらしい教育者としても有名ですが、親日派としても有名です。私は彼女が本当に親日派として韓国に影響を与えたのか、特に慰安婦の募集に関わっていたかという問題意識を持って修士論文に取り組みました。残念ながら修論でそれを明らかにすることはできませんでしたが、その後も伝で金活蘭女史の姪御さんのお宅に伺ってお話をうかがいました。また、梨花女子大学の同窓会名簿を見て、戦前に卒業した日本人がいることを知り、連絡を取ってお話をうかがいました。このように金活蘭女史のすぐ近くにいた人に対する聞き取り調査を通して、だんだん固まってきたのですが、金活蘭は慰安婦募集に直接関わっていないという結論を得ました。

1943 年に梨花女子大学に女子青年練成所指導者養成科が設置されますが、金活蘭は、家事科、音楽家の学生を養成科の卒業生とし、強制的に農村の日本語教師として送り出していたことが分かりました。1943 年は養成科として学生を募集したのですが、1 年間の教育の後、やはり強制的に日本語教師として農村に送り出していたそうです。養成科の卒業生に聞き取り調査をしたところ、自分の出身地の農村に赴き、高額の報酬を得ながら、農村女性に日本語教育を行ったことが判明しました。ここから彼女が慰安婦募集に携わったという話が出てきたのではないかと考えられます。でも常識的に考えて、そこまで周到に用意をして、慰安婦として連れて行くのでしょうか。それよりもだまして連れて行った方が簡単だと思われます。卒業生に対するインタビューでも、日本語を教えていただけで、その中から誰かがいなくなったということはないということでした。ただ、チェジュドではその可能性があるかもしれません。

5. ナヌムの家と聞き取り調査（韓国挺身隊研究会の聞き取り調査の指針から）

私は 1993 年ころから韓国挺身隊研究会に所属して聞き取り調査を始めました（出版された証言集を学生に提示する）。その聞き取り調査の指針ですが、まず誘導質問は禁止です。とにかくじっくり待つことです。次に「さあ、話して」式の聞き取り調査方法は厳禁です。そしてラポールの確立の重要です。特に私は日本人でしたし、すぐに打ち解けられるタイプではありませんので、調査を始めるまで 3 回くらい通いました。また、研究会のメンバーは、

自分がとったデータを研究会の確認作業前に外に公表してはいけません。基本は、時間を縦軸に場所を横軸に繰り返し確認作業をして事実を確定していきます。つまり、おばあさんの話の内容を軍事史などの公的記録とつきあわせて、記憶が物理的に可能かどうか確認し、時間と場所を確定していくわけです。そうしないと、おばあさんの証言が歴史的資料としての価値を持ちません。それから、五感を活用することが重要です。問題になるのはどんな人が連れて行ったか、軍人か民間人かということなのですが、これを知るために、どんな服を着ていたか絵を描いてもらったり、絵を見せて選んでもらったりしました。その結果、軍人だと思っていたのが、実は軍族だったというケースが多かったです。それから、いつ行ったかいつ韓国に帰ってきたのかも重要なことなのですが、それもはっきり覚えているはずがありません。ですから視覚を利用します。すると、「戦争が終わってからだいぶ経っていた」「コスモスが咲いていた」「麦が青々としていた」などの証言が得られます。そこから公的記録を元に船を確定し、時間を確定していくわけです。また、あるハルモニ（韓国語でおばあさん）は、ソンニム（韓国語でお客さん）の中に韓国人、日本人、台湾人がいたというのですが、それはにおいて区別できたということ

でした。そして、悲しい記憶ほど思い出しにくいのですが、悔しい記憶は思い出せるということです。それから、プライバシーの尊重と研究者の使命の葛藤ですが、おばあさんたちは家族のことなど隠しておきたいことがたくさんあるのですが、私たちは戸籍謄本を出してもらわなければなりません。すると離婚していたり、正式な結婚で生まれた子どもではなかったりしたことが分かります。それを本人に確認していかなければならないのは辛いことです。そして、客観性維持と感情移入のバランスをとることですが、話を聞いた後は間接的なレイプを受けたような気持ちになりますが、研究者としての客観性も維持しておかなければなりません。そして聞き取り調査の限界と利点をしっかり意識していなければなりません。最後に、過剰な物品のやり取りはしてはいけないことが決められています。

ナヌムの家は、引越しを繰り返し、現在の所に落ち着いて約 10 年になります。現在は、ハルモニたちの高齢化と病気が深刻化しています。また、入居を希望するハルモニたちが全員入居できるわけではないのですが、自由な生活を選択し、ナヌムの家への入居を拒むハルモニもいます。現在のナヌムの家は組織化し、社会法人化しており、社会福祉の仕事の資格を持っている人が勤務しているそうです。

おくやま ようこ／同徳女子大学校 外国語学部

記録 かわさき としこ／フェリス女学院大学 留学生センター
kawasaki@ferris.ac.jp